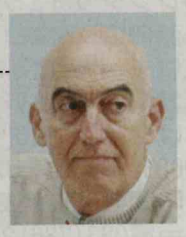
中日新聞（夕刊）　2018年10月5日　（第3種郵便物認可）

千畝が救った神学生たち

11日の名城大シンポに寄せて

ユダヤの精神的礎守る



ロテム・コーネル

ハイファ大（イスラエル）東アジア研究所教授。1960年、イスラエルのテルアビブ近郊で生まれる。筑波大で博士号を取得。『東アジアと人種差別』『日露戦争再考』など欧米で著書多数。イスラエル日本学会会長。

名古屋市の名城大で十一日、杉原千畝（一九〇〇～八六年）の国際シンポジウムが開催される。イスラエルの大学で日本史を教えている私も、パネリストの一人として参加する。杉原は、第二次大戦中にリトアニアで日本のビザ（通過査証）を発給して多数のユダヤ人をホロコースト（大虐殺）から救った英雄である。

ユダヤ人といっても敬虔なユダヤ教徒から無神論者まで千差万別だが、私が着目したのは、ユダヤ教のラビ（宗教指導者）を育てるミール神学校である。この学生と教師、その家族全員の計約四百人が杉原ビザで救われた。ユダヤ教の世界最大の神学校として現在も布教に力を注いでいる。

杉原が救ったユダヤ人の半数以上は、ポーランド東部（現在のベラルーシ）に点在する神学校の学生や教師だった。三九年九月、ポーランドはドイツとソ連によって侵略されて東西に二分割された。東部はソ連占領下となり信教の自由が奪われた。カトリック修道院やユダヤ教神学校が次々と閉鎖に追い込まれた。多数の神学生が集う小都市ミールの神学校は決断を迫られた。自由な独立国リトアニアに脱出したのだ。

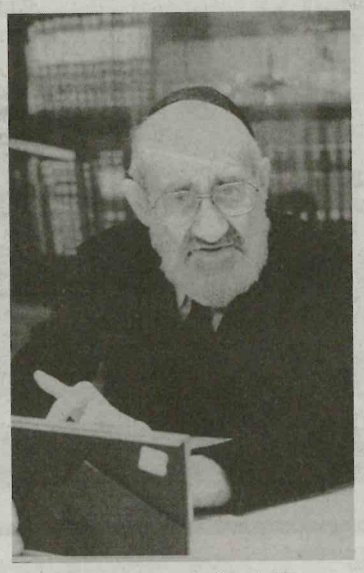
三九年晩秋、ミール神学校の全員がリトアニアの当時の首都カウナス近郊に難民として逃れてきた。ところがリトアニアも彼らの安住の地ではなかった。四〇年七月半ばに同国はソ連に併合され、再度信仰を禁止されたのだ。しかしドイツ支配下の西欧への脱出は無理だった。聖地エルサレムに南下するルートは安全が保証されなかった。唯一可能性があるのは日本に東行して第三国に逃げるルートだった。そして神学生四人がカウナスの日本領事館を訪れた。

今回のシンポジウムの翌日の十二日に杉原の母校である名古屋市の愛知県立瑞陵高校で、杉原千畝顕彰施設の除幕式が行われる。そこにラビの写真一枚が展示される。モイシェ・ズプニク（故人）という男性の写真。カウナスで杉原にビザ発給を願い出た神学生の一人である。彼の回想録によれば、ビザ発給を決断した杉原は当初、難民の所持する安全通行証（パスポート代替書類）に自筆で日本への入国許可を記していた。だから発給業務は遅々として進まなかった。見かねた神学生四人はビザのスタンプを作って発給を手伝い、神学校の関係者全員分のビザを入手した。

中日新聞の九月二日付朝刊の「『命のビザ』模造版あった／千畝退去後も数百人出国か／リトアニアで保管」を読んだ。リトアニアの国立特別公文書館で模造杉原ビザの存在が確認されたという内容の記事だ。精巧に模造されたためソ連当局が見破れず、数百人のユダヤ人が出国を果たした可能性があると記されている。その中で運悪く文書偽造で逮捕されたユダヤ人のビザが四十通も保管されているそうだ。しかし私はズプニクの回想の中で新たなビザ関連の逸話を発見した。

四〇年八月末にカウナスの日本領事館が閉鎖され、杉原はベルリンに引き揚げることになった。引き揚げの前日、彼はズプニクを滞在先に呼び、「旅券に押印するよう大事に持っていなさい」と言って、ビザのスタンプと領事館印を手渡した。杉原の引き揚げに間に合わなかった他の神学校の学生に、ズプニクが杉原の代理としてビザを発給したのは言うまでもない。杉原の離任後でも本物のビザに救われた神学生が少なくなかった。ユダヤ人の精神的な礎である神学校が杉原の寛大な行為によっていくつも救われたと言えるだろう。

（訳・稲葉千晴＝名城大教授）



モイシェ・ズプニク師＝1994年、米ニューヨーク市で（金田秀樹撮影）

メールで申し込みを　シンポジウムは11日午後1時10分、名古屋市東区矢田南の名城大ナゴヤドーム前キャンパスDS101教室で。国内外の研究者7人が公開討論をする。無料。受講申し込みは事務局＝chiunesympo2018@yahoo.co.jp＝へ。

大波小波

「新潮45」休刊に異議あり

一九六一年、嶋中事件が起きた。雑誌『中央公論』が掲載した深沢七郎の小説「風流夢譚」に皇室を揶揄する内容があり、これに怒った右翼団体が版元・中央公論社に抗議、遂に十七歳の少年が嶋中社長宅で社長夫人とお手伝いさんを殺傷するに至った。社長は編集の非を認め、皇室と読者に詫び、編集長を更迭した。この黒い歴史を知らぬ出版人はいない。

LGBT（性的少数者）を「生産性がない」とした杉田水脈論文を擁護する自社雑誌『新潮45』の特集について、新潮社の佐藤社長は非を認めた。が、世間の怒りは収まらず、数日後に休刊発表に至る。

休刊という始末のつけ方に、私は逃げを感じた。詫びが足りないのではない。雑誌の自死以上の詫びはない。問題なのは、こうした前例が積み重なることで、日本の編集全体が萎縮しかねないことだ。私が社長なら、なぜ少数者を庇護することが社会にとって重要なのか、この機に考える一大キャンペーンを張れ、と号令するだろう。やみくもに異論を封殺ないし自己封印するのでなく、闊達に議論できる社会の方が健全ではないか。少数者の庇護が少数意見の封殺につながる―そんな皮肉な事態は、決して生じてはならない。

（休肝老人）

2018.10.5

ベストセラーで読む戦後世相史

末國善己

24

葉室麟「青嵐の坂」

KADOKAWA刊

葉室麟原作の『散り椿』が、小泉堯史の脚本、木村大作の撮影・監督、岡田准一の主演で映画化された。『散り椿』は架空の藩・扇野藩を舞台にしたシリーズの第一弾で、時代背景と主人公を変えながら『さわらびの譜』『はだれ雪』と書き継がれた。葉室の急逝で扇野藩ものの最後の作品になってしまったのが、『青嵐の坂』である。

財政破綻の危機にある扇野藩の中老・檜弥八郎は、領民に負担を強いる改革を進めた。筆頭家老ら守旧派は、弥八郎が賄賂を受け取ったとして切腹に追い込む。弥八郎と不仲だった息子の慶之助は、次期藩主・仲家のお気に入りだったため咎められなかった。また娘の那美は、親戚の中で最も貧しい矢吹主馬に預けられた。数年後、新藩主になった仲家と側近の慶之助は、藩札（各藩が発行して領内で通用させた紙幣）による財政再建を進める。藩札がいずれ行き詰まると考えた慶之助は、主馬に責任を押し付け、詰め腹を切らせることまで計画していたのだ。その頃、慶之助の追い落としを狙う筆頭家老の一派は、改革の対抗馬に主馬を選んでいた。

藩札の大量発行で景気回復と財政健全化を